月報　第一号　バッハ合唱団　一九六三年七月

《バッハ合唱団》誕生にあたって

森井　恵美子

みなさん、よく集って下さいました。私がフランスの地で、フランス人のおじさん、おばさんたちにまじってバッハを歌いながら、遠く日本に想いをはせて、夢みていたことが、みなさんのおかげでこんなに早く現実になるとは、なんというよろこびでしょう。

バッハのカンタータをすることについて、話せばいくらでもあります。でも、私はそれよりも、多くの人が志を同じくして同じ時に、同じ場所に集るという、そのことに今は感動しているところなのです。合唱団はいたるところにできています。そしてそれぞれに歌を歌う場を創造し、あるものは数カ月後、数カ年後に消えてゆき、あるものは細々と、またはますます充実しながら存続してゆくのです。私はそれぞれに、尊いことだと思います。合唱を通じて、人はあらゆることを学びます。私たちの合唱団も、これから多くのことを学んでゆくことでしょう。

ところで、いちばん大切なことは、なんというとも、みんなが顔を合わせることです。百人在籍して五十人ずつ練習にくるようなグループよりも、二十人在籍して十八人練習にくるようなグループとなりたい。雨も降れば、他に出かけねばならないところもできる。人生多事多難です。しかし、にもかゝわらず、毎日曜みんなが顔を合わせる、それが尊いのです。合唱はみんな揃ってこそ一つの楽器となるのですから。まて、やっぱりよかったというふうにどこはさておいてもここだけはそろわけにはゆかないというふうになれたら……。それにはまず第一に、みんなでそういうものを作ることです。特に最初の半年位は、だれにもまだ習慣となっていないから、どうしても努力がいります。そうしているうちに、ここが生活の一つの大きなようどころとなってくるにちがいありません。そうしたらもうもめたもの、その頃には、次々と美しい合唱の公演が苦もなくできている筈です。さあ、みんなでたのしい目標をめざしてはじめましょう。

カンタータ第一番　訳詞

(1) 合唱

朝にかがやく
恵みとまことの たえなる星よ。
シヒデのすえなる
わがイエス君こそ わがこころの主。
うまし、やさし さかえにみちたる
わがイエス いとたかき君よ。

(2) 叙唱（テノール）

まことの神の子
いかにうるわしきかな いのちのことば
ひとみなひさしく まちいたりしもの。
みつかい約して、ベツレヘムにつげぬ、
たえなるみかてよ
おそれも死も、はらわれらになしと。

(3) 詠唱（ソプラノ）

みたせや あまつみ光 わが胸を、
汝をあこがれのそむ わが胸を。
いとつよきこころ もえさかる愛
あまつまろこびを 地にてうくるなり。

(4)
叙唱（バス）
むなしきかがやき　心たのまれず
よろこびは　主より　出ずるなり、
わが救いを　主はそなえたまえばなり。
されば　われら　主に　むかい
ともに　ささげべし
喜びと　感謝の　ほめ歌を。

(5)
詠唱（テノール）
われらの歌と　楽の音もて
なれをたたえん　とわに。
心と　霊は　生ける　かぎり
ほめうたもて　高めゆく
わが主をば　たとうるために。

(6)
合唱
げにさちなるかな
とこしなえの主に　よりたのめば。
あまろみくににて
主は　われをまねき　友としたまわん。
アーメン　アーメン
いざ　きたりませ　さかえの君、
主こそ　わがのぞみ。

―― 註 ――

カンタータ全体の歌詞作者は不明。基礎となっているのは、"コラールの女王"とよばれている美しく気高い、フィリップ・ニコライ（1556－1608）作のコラール（1599作）。彼はドイツ・ハンブルクの教会の牧師で、"ルター教会の柱"と仰がれた人。4篇の讃美歌しか発表しなかったが、そのうちの2篇が"コラールの王"（「おきよ夜はあけぬ」、〈讃美歌〉第174番）、"コラールの女王"（当コラール、〈讃美歌〉第346番）として、ドイツ・コラールの不朽の作となって今日なおひろく愛唱されている。このカンタータでは、最初と最後の節（1、6）は、原詞のままであり、第2、4節では叙唱のために、第3、5節は詠唱のために自由に改作されている。第6節は、カンタータ第49番 Ich geh und suche mit Verlangen にも、最後の節として用いられている。
カンタータ第1番の成立年代 ―1735～44（ライプツィヒ時代）

後記

ここに、第一回月報をおとどけいたします。自己紹介、他己紹介は紙面の都合により八月号に掲載させていただきます。
八月号には右のもの以外に「今年度の計画、バッハ合唱団発足一ケ月をふりかえって」等を載せたいと計画しております。
この紙上をたのしくし、合唱団発展のためにも皆さまの忌憚なきご感想をお待ちしております。どしどしおよせ下さい。

バッハの時代

1685	青年時代
1708	ワイマール時代
1714	ケーテン時代
1723	ライプツィヒ時代
1750	